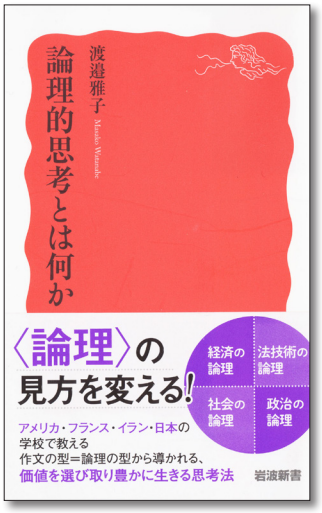

『論理的思考とは何か』

渡邉 雅子 著

岩波書店（岩波新書）

2024/10　204p　1,012 円（税込）

はじめに――論理的思考はひとつなのか

序．西洋の思考のパターン――四つの論理

１．論理的思考の文化的側面

２．「作文の型」と「論理の型」を決める暗黙の規範
　　――四つの領域と四つの論理

３．なぜ他者の思考を非論理的だと感じるのか

終．多元的思考――価値を選び取り豊かに生きる思考法

【イントロダクション】

ほぼすべての意思決定や戦略策定のベースになるものとして「論理的思考」は、一般的にビジネスにおける基本スキルとみなされている。書籍で扱われたり、社内研修などで教えられる論理的思考の手法は、演繹法、帰納法、アブダクションといった共通のものだが、それだけが論理的思考なのだろうか？　本書では、西洋で確立してきた推論の型を紹介した上で、論理的思考が「ひとつ」ではなく、国や地域、言語圏ごとに、それぞれの文化や価値観に紐づけられたいくつかのパターンがあるとし、その分類について解説。場面や目的に応じてそれらを使い分ける多元思考を提唱する。具体的な分類は、経済、政治、法技術、社会の４領域であり、それぞれアメリカ、フランス、イラン、日本で特徴的なものとして論じている。著者は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授。Ph. D.（博士・社会学）。知識社会学、比較教育、比較文化を専攻し、『「論理的思考」の文化的基盤――４つの思考表現スタイル』（岩波書店、2023 年）などの著書がある。

●論理的思考の四つの領域＝経済、政治、法技術、社会

　世界共通で不変のように語られている論理的思考だが、そもそも論理的に思考する方法は本当にひとつなのか。

　グローバル化が進み、世界共通のビジネスモデルや教育モデルが示される一方で、文化の衝突は思わぬところで起きている。たとえば母国で優秀な成績を修めた学生が、海外の大学でつまずくことがある。言語や教育方法の違いがつまずきの理由に挙げられがちだが、母国と留学先の作文／小論文の「論理の展開の違い」に根ざした、思考法の違いが原因であることも多い。

　この文化による論理展開の違いをいち早く指摘したのは、アメリカの応用言語学者カプランである。カプランは世界 30 カ国以上から来た留学生の小論文を分析し、言語圏別に「直線的」、「平行」、「間接的」、「紆余曲折」の四つの論理展開のパターンを特定した。

　しかし、論理のパターンに注目して文化を分類する方法は、言語や国という単位の他にも考えられる。たとえば、どの国（社会／共同体）にも共通して存在しているのが、政治、経済、法、社会という領域である。

　そこで、「経済」、「政治」、「法技術」、「社会」の四つの領域の原理をそれぞれ社会の中心に据えている国、具体的には、アメリカ、フランス、イラン、日本の４カ国の学校で教えている「作文の型」に注目して各領域の論理的思考を抽出する。

●経済領域の「５パラグラフ・エッセイ」と、政治領域の「ディセルタシオン」

　経済領域のレトリックを代表すると考えられるアメリカの５パラグラフ・エッセイは、

証拠を挙げて主張の正しさを証明し、読み手を説得することを目的とする。

・エッセイの型
　序論　主張
　本論　主張を支持する三つの根拠（事実）
　結論　主張を別の言葉で繰り返す

　エッセイの最大の特徴は、最初の段落（パラグラフ）で結論となる主張が提示されることである。私たちが思考する時には、観察やデータの分析から徐々に結論に向かって推論を進めていくが、それをエッセイの型で書くには、結論を先に述べて実際の思考の過程を倒立させる。

　一方、政治領域のレトリックは、慎重な政治的判断を行うために「十分な審議が行われたか否か」が重要な観点となる。

「ディセルタシオン」と呼ばれるフランス式小論文は、弁証法を基本構造とする。弁証法は、論ずべき主題に対する「一般的な見方」、「それに反する見方」、「それらを総合する見方」を〈正－反－合〉の構成に位置づけて、〈正〉と〈反〉の矛盾を〈合〉で解決する。これらの三つの見方を検討する中で、結論を導くためにあらゆる可能性が吟味される。

・ディセルタシオンの型
　導入　（１）主題に関わる「概念の定義」、（２）「問題提起」、（３）「三つの問い」による全体構成の提示
　展開　弁証法：ａ定立（正）
　　ｂ反定立（反）
　　ｃ総合（合）
　結論　（１）全体の議論のまとめ、（２）結論、（３）次の弁証法を導く問い

　ディセルタシオンは導入部分で、議論の中心になる主題を提示し、その主題を論じる全体構成を示す。この時、鍵になる概念の定義を行い、与えられた問いの、どの側面について論じるかを書き手自身が提起する。これを問題提起と呼ぶ。そしてこの問題提起を「問い」の形にして表明し、さらに展開部分の〈正－反－合〉を導くための三つの問いに分解して提示することで、論文全体の構成を読者に示す。

　展開部分では、書き手が立てた先の三つの問いに答える形で、主題に対する「ある一般的な見方（正）」、それとは「相反する見方（反）」、これら二つを「総合する見方（合）」を提示してそれぞれの見方を文献の引用によって論証する。

　そして結論部分では、これまでの議論の流れを短くまとめ、与えられた問いに答えて結論とし、次の弁証法を想起させる新たな問いを提示して終わる。

　弁証法の流れでは、問いに対して「はい／いいえ」のいずれかの立場を取ってその立場を論証するのではなく、このような場合ならば「はい」という答えが、別の場合ならば「いいえ」という答えが妥当になるその条件を吟味して、両方の立場を論証する。

●法技術領域の「エンシャー」と、社会領域の「感想文」

　法技術領域のレトリックにおいては、「真理か否か」が重要な観点となる。真偽の判断を行う議論では、「結論（答え）が一義的（ひとつ）に決まること」が重要である。

　イランの学校作文は、作文一般と書く教育を表す「エンシャー」というペルシア語で呼ばれ、初等教育から中等教育を通して主に四つの主題を扱う。それは、（１）自然現象について、（２）社会と道徳について、（３）宗教について、（４）国家について、である。

・エンシャーの型
　序論　主題の背景
　本論　主題を説明する３段落
　　細かな主題群の三つの展開、三つの具体例など

　結論　全体をまとめ、ことわざ・詩の一節・神への感謝のいずれかで結ぶ
　エンシャーは、序論で比喩によって主題を表現し、本論では比喩に関連づけて主題の内容を三つに区切って説明した後、結論で簡単に本文の内容をまとめて、作文のメッセージを的確に表現する、ことわざ、詩や聖典の一節、または神への感謝のいずれかの結びの言葉で締めくくる。

エンシャーと呼ばれる作文一般に見られる〈論理的〉であることとは、作文全体を序論・本論・結論の三つに分け、そして本論を三つに分けて書くことである、それが「理路整然」と書くことを保証し、この基本構造に従うことが「秩序」に従うことを意味すると作文の教科書は述べている。

最後に、社会領域のレトリックで重視されるのは社会の構成員から「共感されるか否か」である。法技術領域に見られるような普遍的・絶対的な倫理ではなく、共同体を成り立たせる親切や慈悲、譲り合いといった「利他」の考えに基づく個々人の「善意」が社会領域の道徳を形成する。道徳形成の媒体となるのが「共感」である。

社会領域のレトリックを体現するのは、日本の感想文である。感想文とは「生活の中の直接の体験や、自己の見聞、読書、視聴したことについて、自分の感じたこと、思ったことを書き表した文章」だと定義されている。

・感想文の型
序論　書く対象の背景
本論　書き手の体験
結論　体験後の感想＝体験から得られた書き手の成長と今後の心構え

書く様式としては序論で書く対象の背景と書き手が対象に対して持っていた感想（理解・知識・考え・感情）を書き、本論で対象を通した書き手の体験を述べ、結論で体験後の感想を述べる３部構造である。

体験の前後での書き手の気持ちや考えの変化を感想という形で述べさせる根底には、体験を通して何を学んだのかを書く、つまり体験を通した自己の成長の軌跡を描かせ、その体験を今後どう自己の行為や生き方に生かすのかを考えさせる目的がある。読書感想文はその典型であり、読書によって書き手のものの見方や考え方がどう変わったのかが感動をもって書かれており、それが読み手に伝われば読書感想文は成功である。

●目的に応じて複数の論理的思考を使いこなす「多元的思考」を

専門領域固有の論理の違いをまず知ること、そして思考の「技術」として使いこなせるようになることは、多様な場面で何が効果的あるいは合理的な思考法なのかを特定し、実践することを可能にする。複数ある論理的思考を、目的に応じて選択して使いこなすことを本書では「多元的思考」と呼ぶことにする。

たとえば、なんらかの問題の解決を考える時、解決にかかる費用や時間を優先させるのか、コストが高くついても問題に関わる人々の利益を最大限に考えるのか、規範やイデオロギーの遵守を優先させるのか、それとも共同体のつながりや存続を重視するのか。それぞれの領域には、問題を解決するための論理的な手続きと思考法があるため、どの領域を優先させて考えるのかを決定した後は、それに見合った思考法を技術として使うことができる。

さらに四つの領域の本質論理を知ることは、決定のための議論を行っている最中でも、その意見はどの立ち位置から述べられているのか、どの論理に基づいて思考されているのかの確認が可能になる。論理的に思考する方法が複数あることを知ってはじめて私たちはそれらを「選択肢」として持つことができる。

コメント：著者は社会学者ウェーバーの理論をもとに「合理性」を「形式合理性」と「実質合理性」の二つに分けて解説している。前者は、明確な目的の達成の手段としての合理性であり、後者は、理想や理念に近づくために、目的そのものの価値を探るものだという。四つの領域でいえば、前者が経済、法技術にあたり、後者が政治、社会にあたる。経済、法技術の論理的思考はシンプルで力強いが、いささか退屈なものになりがちだ。反面、政治、社会の論理的思考の過程には、物語性があるのではないだろうか。多様な論理の筋道を「楽しむ」姿勢も、思考スキルを身につける上で重要なのかもしれない。

※本ダイジェストは著作権者からの許諾に基づき、書籍本文を再構成して作成しています。
※本ダイジェストをユーザーご自身でのご利用以外で許可なく複製、転載、配布、掲載、二次利用等行うことはお断りしております。